# 現代日本における動物倫理学の展望
## ――『はじめての動物倫理学』への反響から考える

田上孝一

### はじめに

2021 年 3 月に上梓した『はじめての動物倫理学』（集英社新書、以下「拙著」と略記）を巡り、これまで直接的及び間接的に受けてきたさまざまな反応を素材にして、現代日本における動物倫理学の受容状況とこれからの展開を考えたい。これからの展開という際には、事実としての可能性と規範としてのあるべき方向性との両面を含む。

以上が本報告の主旨だが、ここではこの主旨と関連させながら、私自身が動物倫理学をどのように考えているのかという論点と、どのような学問として発展させるべきかと考えているかという論点も、若干ではあるが付け加える。この意味で、本報告には余り厳密ではない印象論的要素が含まれるが、そういう面も併せて、何かのヒントになれば幸いである。

### 第 1 節

動物倫理学を研究するようになったのは、拙著でも簡単に触れたように、元々の専門ではなく、倫理学や環境論を教えることになって、肉食を続けることへの何とも言えない居心地の悪さに苛まれたためだった。シンガー自体は早い段階から知っていたが、博士論文（『初期マルクスの疎外論――疎外論超克説批判――』時潮社、2000 年）までは初期マルクス研究に専念し、動物倫理学はその後に本格的に研究を始めた。

この際、『実践の環境倫理学――肉食・タバコ・クルマ社会へのオルタナティヴ――』（時潮社、2006 年）に記したように、インド旅行の衝撃が強かった。ベジタリアンになどなれるはずはないと思っていたのに、インドではベジタリアンであることがむしろ普通だったからである。

こういう理由で、当初は動物倫理学よりもむしろベジタリアニズムが研究テーマで、この分野の最初の論文を世に問うたのは 2004 年だった（前掲『実践の環境倫理学』所収）。既にこの時点で世界的にはかなり研究が進んでいたが、本邦ではベジタリアンについての

倫理学的な研究論文というのは新奇なもので、これは世間一般の常識と対応していた。この当時は「ビーガン」という言葉も一般には殆ど知られていなかった。このため、私の論文というか、上記書のベジタリアン章は多くの反発を巻き起こし、嘲笑されたりもした。

その後、食のみならず問題関心を動物自体にまで広げ、主として編著や共著に論文を書き続けた。それらをまとめたのが『環境と動物の倫理』（本の泉社、2017 年）で、この本は少部数出版の割には多くの読者をひきつけた。拙著が誕生することになった直接的なきっかけも、編集者がこの本を読んだからだった。

こうして動物倫理学の研究を始めてから 10 余年が経過したが、私の予想に反して動物倫理学の研究者は増えなかった。これは元来マルクスや社会主義の研究者である私がこの分野で研究を継続した理由でもある。しかしごく最近の短い期間に、研究状況はかなり変化した。そしてこれも、世間の雰囲気と対応しているようである。かつては研究者や活動家しか知らなかったビーガンという言葉も、一部で不適切な解釈も広がっているようだが、概ね適切に理解されて、日常語になりつつある。そしてこのような状況の変化があったからこそ、拙著が出版できる素地もできていたと思われる。実際ビーガンという言葉を殆ど誰も知らないようなかつての状況では、拙著のような本を出すことはできなかっただろう。

拙著は依頼されたからこそ書いたし、書けたものだったが、結果的には本邦初の動物倫理入門新書になった。このことの意味は、私自身が考えていた以上に重いものであったことが、後々痛感されるようになる。

このワークショップに参加されているような動物倫理研究者の中には、拙著の内容は大したことはなく、理論的な意義などないと考える向きもあろうかと思うが、たとえそれが真実だとしても、拙著にはそれとは次元の異なる独自の意義があったことが、出版後に思わされたことである。

拙著には研究者にも新奇な内容が幾何か含まれていると思うが、その多くは既知のものだったろうと思う。そしてそれは新書という体裁上、仕方のないことでもあった。実は私としても、研究者に限らず、拙著が多くの読者に新奇なものと受け止められるとは思ってもみなかった。しかしこれは思い違いだった。研究者ならぬ一般読者の多くは、拙著で論じられた事柄の殆どを知らなかったのである。

翻訳も多く出てるし、解説も多いのでシンガーの議論ぐらいはある程度は知られている

のかと思っていたが、そんなことはなかった。「種差別」という言葉を、殆どの読者は拙著で知ったようなのだ。

この理由は簡単で、多くの読者は専門書を読まないからである。専門書を幾ら出しても、まさに専門研究者や学生、それに一部の好事家にしか知られない。多くの人は文庫や新書、若しくは一般書しか読まないからだ。

こうして拙著は図らずも、動物倫理学という学問それ自体を初めて一般読書界に知らせることになった。この意味で、拙著の出版は1つの歴史的出来事だったと言ってよい。

拙著は残念ながらベストセラーとまでは行かないが、私の予想を超えた反響をもたらした。1つは大手全国紙を始めとしたメジャーなメディアで取り上げられたことだが、最も驚いたのは、実に10校近くの大学や大手予備校で試験問題として採用されたことである（ワークショップ時点）。こうしたことは、動物倫理学的な議論への世間的関心が大きいことの現れだろう。

## 第2節

ところで、別のところでも書いた（「動物倫理学からする食の規範」、季報『唯物論研究』第155号、2021年5月刊、所収）が、同じ奥付の日（2021年3月22日）を持つ浅野幸治氏の『ベジタリアン哲学者の動物倫理入門』（ナカニシヤ書店）が出たのは驚きであり、喜びでもあった。浅野氏と私は、思想的立場は違うはずだが、動物倫理に関しては、これだけ同じような考えの文章を読むのは、少なくとも邦語文献では初めてだったからである。拙著に比べて浅野書のほうが平易であり、むしろ新書向きだと思うが、しかし浅野書がこのままの内容で新書化されるのは難しかっただろう。浅野氏の問題提起は拙著に比べてよりソリッドで端的だからである。

動物倫理を巡る困難は、理論的にも商業出版上も、常に肉食と結び付いている。肉食の拒絶を厳しく読者に求める浅野書が新書枠で出版できる可能性は低い。それでも、拙著の他に明確に動物の権利を訴える浅野書が一般書寄りの枠で出版されたことは、明らかな時代の変化を感じさせる出来事であった。

ではなぜ我々のような書籍の出版に示されるように、最近になって動物倫理が一般的にも注目されるようになったのだろうか？

正確には分からないが、我々が求めるように、動物に対する意識が高まったというのは残念ながら副次的な理由だろう。やはり主要な理由としては環境問題と健康意識の高まりが考えられる。その意味で、ファッション先行の面があるのは否めない。

ただ、だからと言って一時的流行と決めつけるのは早計である。環境は悪化し続けてるし、高齢化社会に向けて健康問題は常に人々の関心の中心に在り続けるだろうからだ。だからこうした主要な関心ルートから、動物倫理本来のテーマにコミットするようになっている人も出てくるし、小さな流れが徐々にではあるがやはり広がって行くだろう。

ではこのような現状の中で、どのような形で動物倫理を広めていくかだが、取り立てて流行に迎合する必要はないものの、やはり「健康で環境に良いライフスタイル」というイメージに乗ってこれを積極的に広げていくという形で、脱肉食、脱動物性食品のアドバンテージを宣伝していくというのが効果的なように思われる。勿論健康で環境に良いことは、倫理的にも望ましくもある。

この意味で、動物倫理の焦点はやはり最初から最後まで肉食の問題ということになる。これは動物倫理学の授業をする中でも、常に感じていることでもある。

脱動物性食品の提唱は、少し前まではハードルが高かった。しかし今はかなりマーケットが広がってきていて、厳格さを追求しなければそれほど困難なく実行できる規範になっている。こうしたことから、動物を利用しない生活のあり方を自らも実践しつつ人にも説いていくというのが効果的な方法と言えるだろう。

ではそうした実践が望ましいとして、今後どのような形で動物倫理は広がって行くだろうか？

当然これも正確には分からないものの、やはり健康と環境をキーワードにして、主としてテクノロジーの発展を梃子にして広まって行くのではないか。ここでテクノロジーというのは代替技術で、食品を中心に動物実験やさまざまな分野で代替が進み、結果的に動物倫理的に好ましい現実が現出していくという形が有力だろうと思われる。

勿論こうしたあり方よりも人々の意識が変化して積極的にビーガニズムが推進されるようになったりするのが望ましいが、食は最も保守主義が発揮される領域なので、限定的な変化に留まらざるを得ないだろう。ただ、限定的にであってもやはり変化を引き起こすことが重要で、動物倫理提唱の真骨頂もこうした人々の意識変革を促すことにある。

## 第３節

この点に関わって、そもそも「動物倫理」という言葉自体に対する世間的な反応を反省する必要があるのではないかと、ここ最近考えるようになった。

印象論でしかないが、どうも世間ではこのところ、動物倫理という言葉自体にベジタリアンやビーガンを想起し、現行の動物利用に批判的なスタンスの学問であるかのような、規範的な意味を読み込んでいる人が多いように思われる。

別に価値中立的もしくは自己の規範的立場を強く打ち出さずに動物を倫理学的に考察することは可能だし、そうした営みを「動物倫理学」といっても構わないが、この学問の歴史を振り返ると、むしろ積極的な規範を打ち出し、人々にコミットメントを促すという作風がスタンダードだったように思われる。

この意味で、最近の動物倫理という言葉に対する世間の反応に対して私は、この学問が広く受け入れられているわけではないものの、少なくとも誤解なく受け止められているという好ましい兆候ではないかという思いを抱いている。

実は拙著で、動物倫理学をまさにそう世間が受け止めているような学問であることを動物倫理の前史と本史に分けて概説した。まさか拙著の影響が主だとは思わないが、拙著の出版が若干であってもこうした正しいイメージ形成に寄与できたのではないかと自負している。

この点に関わり、学問としての動物倫理学はどうあるべきかという問題がある。勿論学問研究は自由なので、研究者は自由に自説を展開すればいいが、やはりある程度は望ましい方向性というのは考えられるだろう。

元々英語圏で発展した学問で、現在の議論も英語圏の論者が引っ張ってはいるものの、だからと言って必ず追従しなければいけないということはない。しかし英語圏で見られる議論の展開はやはり歴史的背景から見て一定程度の必然性があり、先ずはフォローして吟味すべき対象であることには変わりない。これを十分に咀嚼する前から「日本的な動物倫理」みたいな方向に流れるのは避けたい。

現在の英語圏での研究では、先ずは「動物の権利」を認める若しくはその問題意識を承認することを前提にして、その上で議論を精緻化するという形になっている。やはり、取

りあえずこの地点までには達しておかないといけないだろう。

我が国では未だに、動物倫理＝シンガーというイメージが強く、シンガーだけを読んで何となく批判的なコメントをして動物倫理をやっつけるみたいなスタイルが蔓延っている。やはり何とかこの域から脱したい。シンガーは確かに重要だが、彼だけ読めばいいというものではない。

この点で、最近の井上太一氏の訳業は、シンガーばかりに偏っていた文献紹介に風穴を開ける役割を果たしている。彼の存在は貴重である。井上氏は最近も、翻訳のみならず批判的動物研究を中心に動物倫理研究の最前線を伝える労作である『動物倫理の最前線：批判的動物研究とは何か』（人文書院、2022 年 5 月）を上梓し、今後の動物倫理学研究に関して適切な方針を提起している。安易な日本的動物倫理の類に流れるべきではないという前提は、井上氏にも共有されているのではないかと思う。

**第 4 節**

批判的動物研究や今後の動物倫理の研究方向ということでいえば、シンガーにせよレーガンにせよ、動物倫理は文字通りに倫理学であって、社会理論としての面は余り強調されてこなかったきらいがあった。

私自身、マルクス研究と動物倫理は別枠で行っていて、社会哲学的な領域で研究し続けていたにもかかわらず、動物倫理を社会理論に包摂するという意図はなかった。しかし考えてみると、現代における動物倫理学最大の焦点である工場畜産は、まさにフォーディズム最大のインスピレーションになったわけである。

工場畜産の古典的告発者といえばアプトン・シンクレアであるが、彼は元々社会主義者であり、工場畜産告発の古典として名高い小説『ジャングル』（1906 年）の主眼は労働問題にあった。この小説によって畜産業界の酷い実態が暴かれて、結果的に食肉生産の安全性向上に資することになった。しかしシンクレア自身は、肉食の問題はあくまで労働者の悲惨な現状を読者に印象付けるための効果的な素材と考えていたのであり、この小説によって社会主義運動を盛り上げようというのが彼本来の意図だった。

『動物の権利』の著者として、動物倫理学の前史における代表者であるヘンリー・ソルト（拙著第二章参照）も、自らの動物権利論と社会主義思潮との関連を意識しており、こ

の意味で動物倫理は、歴史的にはむしろ社会理論と密接な関連にあった。

私も拙著執筆を機にマルクスと動物倫理との関連を本格的に考えるようになり、案外結び付くのだなと思ったものだったが、考えてみれば元々動物倫理は社会理論としての面が強かったわけで、その意味では結び付くのは当然ということになろう。

この点で、社会理論としての動物理論という研究スタイルが、井上氏が伝えてくれたように「批判的動物研究」として英語圏で既に大きく展開されていたのは、意外な事実ではあったが、動物倫理学という学問の性質上、必然性があったとも言える。

批判的動物研究について詳論することはここではできないし、多様に展開していて全体像がつかみ難くもあるが、資本主義批判と動物解放を内在的に結び付けるというのが最大公約数的な性格付けになろうか。

例えばデビッド・A・ナイバートは資本主義における人間抑圧と動物抑圧の本質的連関を強調し、人間と動物を同時的に解放する理想として「民主的社会主義に基づく世界秩序」（井上太一訳『動物・人間・暴虐史：“飼い貶し”の大罪、世界紛争と資本主義』新評論、2016 年、309 頁）を求めている。

また Barbara Noske は *Beyond Boundaries: Humans and Animals* (Montreal /New York/London, Black Rose Books, 1997)で、マルクスの『経済学・哲学草稿』における「４つの疎外」を動物に当てはめ、資本主義における動物抑圧を告発している。これはマルクス自身には思いもよらない、マルクス理論の現代的適用の１つだろう。ただしマルクスの言う疎外は自らの産物によって支配されることだから、人間による一方的な抑圧は厳密には疎外ではない。

こうして図らずも私が別々に研究していた両分野が結び付いた理論展開が実在するわけだが、当然ながら自分と同じ理論的立場として、支持せざるを得ない。

こうした批判的動物研究が我が国の動物倫理及び倫理学研究者多数の同意を得るとは、残念ながら思えないのだが、それはともかくとして、このような批判的動物研究が動物倫理学の異端的展開ではなく、むしろこの学問本来のあり方の現代的表現と言える可能性を考える必要があろう。つまり動物倫理学はその古典的形態からして、社会変革を志向してはいなかったかということである。この意味で、動物倫理を社会主義思潮の中に位置付け

直すという作業も個人的には射程に入れている。

付記　本稿は日本哲学会第 81 回大会公募ワークショップ「動物倫理について哲学的に考える」(2022 年 5 月 22 日）の発表で使用したスライドを若干の加筆の上で文章化したものである。また本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金［基盤研究（C）課題番号 21K01315（分担者）］に基づく研究成果の一部である。